

第一回仏教図書館協会研修会

大蔵經の歴史とその構成 〈講義Ⅱ〉

平 塚 義 澄 (龍谷大学大宮図書館・副参事)

2世紀半ばの後漢の時代に仏教は、インド、あるいは西域から中国に渡って来られた渡来僧や、中国より命をかけてインドに渡って、仏典を求めて旅された求法僧によって、中国への道が開かれていきました。

さて、仏教を説かれたお釈迦様（お釈迦様のことを世尊ともお呼びします）は、ベーサリーの郊外で最後の教えを説かれました。その最後の教えの中で、「自らを燈明（灯）とし、自らに帰依し、他に帰依してはならない。法を燈明（灯）とし、法に帰依し、他に帰依してはならない」とお説きになられました。やがて、仏陀（世尊）の遺教という形でお釈迦様の最後の戒めとして「これまでに説いてきた教え（法）こそ、おんみらの師である。教えのとおり道を修め、怠りなくつとめるがよい」というお言葉が残されています。（補足ですが、お釈迦様がご入滅に際し、仏弟子の大迦葉とその一行がその悲しい知らせを受けて、馳せ参じました。その時に、大迦葉の一行の中に「あっ、これで自分達も楽になった」という弟子が早くも生まれてきたと伝えられています。）そこで、お釈迦様の教えを正しく伝えなければならないと、仏滅後ほどなくして第一結集という形で、最初の結集が開かれました。

第一結集についてのことですが、最初は經=いわゆるお釈迦様の教えですね。教えと、そして、僧伽（僧侶の集団）あるいは、僧侶としての戒律が整理されていきました。具体的には、いつもお釈迦様の身の回りをお世話した「多聞第一」といわれた阿難尊者が、事実、自分がお聞かせいただいたお釈迦様の教えを多くの弟子の前で誦出します。そして、

その場に集まった仏弟子たちがそれを聞き、正しければもう一度、合わせて復誦します。それを合誦といいます。こうして、当初は、書写ではなしに口から口へと口伝されていましたと伝えられています。その後、第二、第三結集が開かれますと、時代も滅後200年を過ぎ口伝による法の伝持も難しくなってきました。戒律も乱れてきます。そして、ようやく仏典として書きとどめられる時代を迎えるようになります。

紀元前後に、アショカ王とかカニシュカ王が世に出られて、仏教の混乱が是正され、正しい仏教が守られていくことになりました。2世紀頃には、第四結集が開かれて論藏が編纂され、經・律・論の三藏が確立しました。かくして仏教は上座部系といわれる、長老方を中心とした部派系により南方仏教として伝えられ、やがて、「パーリ語三藏」の成立に至ります。

「大蔵經」は、經・律・論という順で編纂されていますが、「パーリ語三藏」は、律藏が中心で、一が律藏、二が經藏、三が論藏、律・經・論の順で、構成されています。その後時を隔てて、高楠順次郎監修の下、日本で『南伝大蔵經』が刊行されました。

ところで、大谷大学図書館から頂戴しました『書香』（第14号）に、貝葉についてその作り方、並びに經緯が述べられていますが、インドではその貝葉に、当初は口伝だったのですが、貝多羅葉（ターラ）の樹皮に書いて、書きとどめておく經典が生まれてきました。そもそもインドは、文字そのものは身体にとどめておくことの方が神聖である。身体にとどめておくという思想がありました。中国は

文字による記録を大切にする国であります。

やがて貝葉經典は雪山、シルクロードを通って、中国へと渡っていきます。一方、インドへ渡って行かれた方々を入竺求法者（竺とは天竺のこと、インドの古い呼び方のひとつです。）といいますが、その一人法顕は、紀元後399年、60歳の頃、求法の旅で中国から天竺へ仏法を求めて行かれました。その記録を伝える『法顕伝』には「熱風に遇へば、則ち皆死して……」と記されていて、皆大変な気候と過酷な自然条件の中で命を失っていました。空には飛ぶ鳥もなく、地には走る獸さえいない、という非常に困難なところでありまして、唯だ死人の標識を見るのみであったと書かれています。

かくして、經典が翻訳される時代を迎えます。その先駆けは、安息国という西域の国の安世高（後漢の148年洛陽にて帰化）という方です。この方が仏典を翻訳された最初の方であります。以来、經典の翻訳が後漢の時代から元代に至るまで、1200年から1300年の永きにわたって続けられています。

漢訳の「大藏經」ができるには、まず、インドとは全く異なる言葉に置き替えていくという翻訳をしなければなりません。そういう意味でこれは大変な労苦と費用を必要としました。具体的には、後漢の時代からずっと訳經の時代が続きますが、インド・西域から来られた方を渡来僧、中国からインドへ行かれた方を求法僧という形で伝えられています。

翻訳の時代にも、時代区分があり、①古訳時代、②旧訳時代、③新訳時代に区分されています。法顕は古訳の時代に当たり、旧訳時代の代表は鳩摩羅什で、新訳時代の代表は玄奘です。唐の時代、玄奘は本来の読み方とか、もう一度自分の身体で知りたいと、自らインドに求法の旅に出て、沢山の經典を持って帰り、新しい訳し方を試みました。龜茲国出身の鳩摩羅什（4世紀後半）は、もともとインドの血を受けた方と伝えられています。訳經僧、經を訳される方の多くは、中国ではなく、西域からインドにまたがる地域の方であり、中国語、漢語を勉強しながら經典を訳していました。

次は、「經典目録」についてであります、

漢訳經典目録のことを「經録」と略称されます。大谷大学図書館長の木村先生から詳しくご説明のありました。その端緒は、道安の『綜理衆經目録』、即ち『道安錄』のことです。南北朝初期の僧・道安は仏団澄に師事して、大変な苦労をされました。これまでの仏教の理解が「格義仏教」即ち、中国思想を媒介にした理解にとどまって、決して正しい仏教理解ではなかった故に、道安はあらゆるものを集めて、真義の把握に努められました。そして、一方では弟子の育成にも力を注がれ、中国仏教発展の基礎を固められました。その『道安錄』は現存せず、僧祐の『出三藏記集』にその姿を見ることができます。その構成は、先ず①インドにおける經・律・論の撰述記録（縁起）。②經典・經名目録（經録）。③中国人による經典に対する序文。④訳經者の列伝（伝記）。⑤法集目録となっています。この經録には、中国出来の偽疑經典が經として記録されています。また、初期の經録は一切經の意味で「衆經」と名付けられています。

次いで『大唐開元釈教錄』。唐の時代の「經録」の中心になります。新訳時代の幕開けとして玄奘三蔵が自らインドより沢山の經典を持ち帰り、新たな經典の流入を通して、やがて道宣の『大唐内典錄』が作られ、「釈教錄」が編まれていきます。この時代の經典の分け方は、隋の時代に入って大乘・小乘の区分けが「大乘修多羅藏」、「小乘修多羅藏」という形で区分されています。即ち、大乘・小乘が明確に分けられていました。かくして、經典の目録によって、今まで訳された沢山の經典が整理され、かつ散乱を防いでいくことになりました。經典の数も、唐の時代には2000を超える部数と8000を超える卷数が記録されています。

続いて、智昇の『開元釈教錄』の構成に少し触れてみましょう。ここで、注目されるのは、配列です。今日の大藏經典のあらゆるもの、經録もそうですが、經典の目録構成はこの『開元錄』を範としています。先ず般若部から始まり宝積部、大集部、華嚴部、涅槃部、と五大部に区分され、その卷数は5048巻。世に「藏經5000卷」と通常称されるようにな

りました。そして律、伝記と続きます。聖賢伝といいまして、西土撰述分と此土撰述分とに分かれています。此土は、中国のことですが、かくして基本体系ができてきました。そして、經典に対する正偽の判断も加えられ、經録を以て、書写による欽定の大藏經が生まれる素地ができ上りました。

先にも触れました代表的訳經者についてであります。古訳時代の代表は、安世高とか竺法護、それから釈法顕です。鳩摩羅什から始まる旧訳時代では、鳩摩羅什とか曇無讖とか梁の時代に僧祐が出てきます。真諦は海を越えて中国に渡来しました。その一人、菩提流支について少し述べてみましょう。北魏の時代に曇鸞という淨土教にとっては非常に名高い方がおられました。この北魏の時代は、非常に乱れた時代といわれています。そのような時代の中で、曇鸞大師は自身が病床の身であっては仏法を学ぶことができないということで、長生不死の道を求め、仙術の法をしての帰り道で菩提流支に出会い、仙經を焼き捨てました。そして淨土經典を授かり眞実の仏教に目醒めて行かれました。

そのことを親鸞聖人は

「本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしへにて
仙經ながくやきすてて 淨土にふかく帰せ
しめき」（『三帖和讃』）

と和讃にされました。

そして、次の新訳時代には唐代を代表して玄奘や義淨が登場します。

さて、中国では紀元後2世紀初頭の後漢の時代に蔡倫という方によって、紙が発明され、書写の時代を迎えるようになります。いわゆる、写經の流布です。そんな時代も相俟って、仏教は書写隆盛の時代を迎えますが、やがて書写から開版、いわゆる印刷の時代を迎えます。大藏經の印刷については宋の時代からと聞き及んでいます。

先にも触れましたが、唐代の『開元釈教錄』に基づいて大藏經が整理されて行きます。先ず、般若部から始まり、帙という容れものに納まるのですが、その帙には今の番号に替わって、いわゆる「天地玄黄」から始まる「千字文」が振られています。

「蜀版」即ち「北宋版」は、太祖の972年に

雕造を開始、11年の歳月をかけて完成した最初の開版大藏經で宋代の国家事業でありましたので、勅版といいます。この宋朝の時の皇帝は非常に心の大きな人だったのでしょうか、仏教国である近隣国にそれを贈呈しています。それが西夏という国であったり、高麗という国に渡ったり日本にも贈与されたと聞いております。ところで、日本では、東大寺の奮然という方によって齋され、藤原道長の法成寺の經蔵に安置されたのですが、それが焼かれてしまい、僅か京都の南禪寺に保存されていると伝えられています。「蜀版」そのものは、金国の軍が攻めてきて都市が陥落します（1126年）。そして、經典もろとも灰燼に帰し、宋朝の終わりと運命を共にすることになりました。なお、蜀版は僅かに京に残ったもので、一端を知られるわけありますが、幸いなことにその遺風は西夏、高麗に引き継がれ、大藏經が編まれていきました。

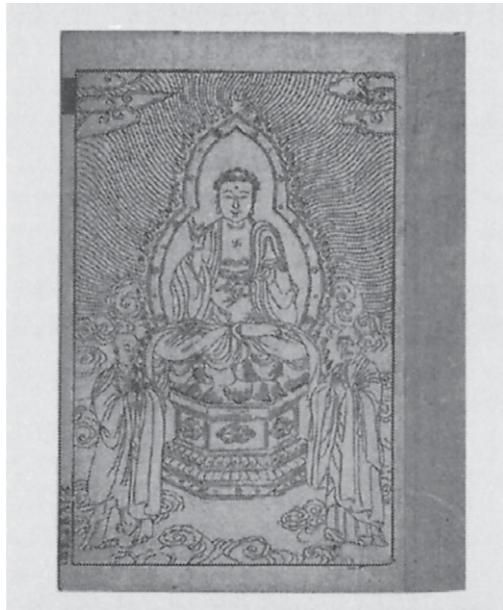
次は私版ですが、「福州版」、福州というところで、2本あります。東禪寺本と開元寺本です。一行17字で作られています。当初、唐代では書写は14字でしたが、17字になっています。折本による刷り本です。それから、同じく南宋版で、「思溪本」、思溪という言葉が使われていますが、これは、豪族の王永從という篤信者によって開版されました。しかし、蒙古軍の兵火（1276年）を浴びて、經板の全てが焼失してしまいました。

そして、「磧砂版」。これも有名です。宋から元代にわたって完成したと伝えられていますが、これは、磧砂という土地の名前にちなんで磧砂版と名付けられました。一行17字の摺帖形式で、南宋のいわゆる「思溪版」の流れを受けていると窺っています。

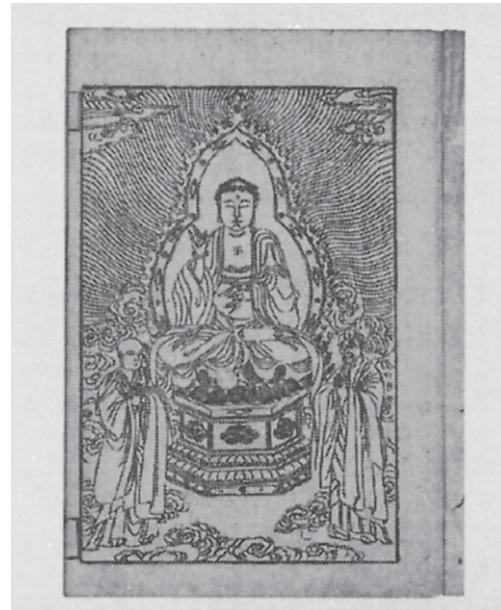
続いて、「普寧寺版」ですが、寺の名前を以て大藏經の名前にされています。道安らによって開版されました。「思溪版」の継承を受けていました、当時の庶民教団でありました白蓮宗に関わりのある大藏經です。土地の人々の喜捨とか、様々な形で編まれました。やがて日本に伝わり、「縮刷藏經」、「大正新脩大藏經」等の校訂に使われます。勿論、先程の「思溪版」は、「天海版」の底本にもなりました。

万曆版と鉄眼版の比較

万曆版

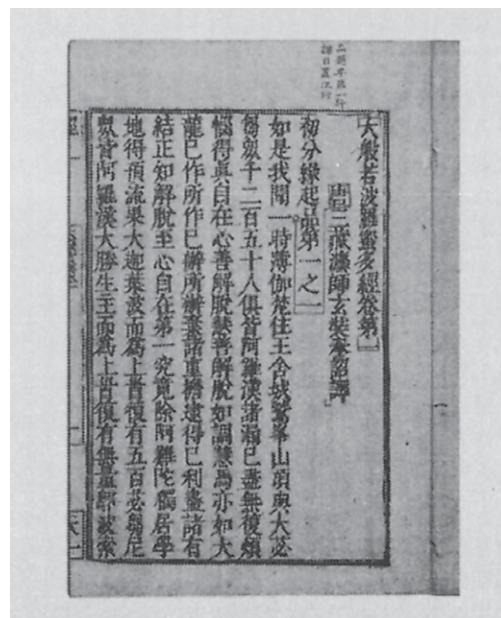
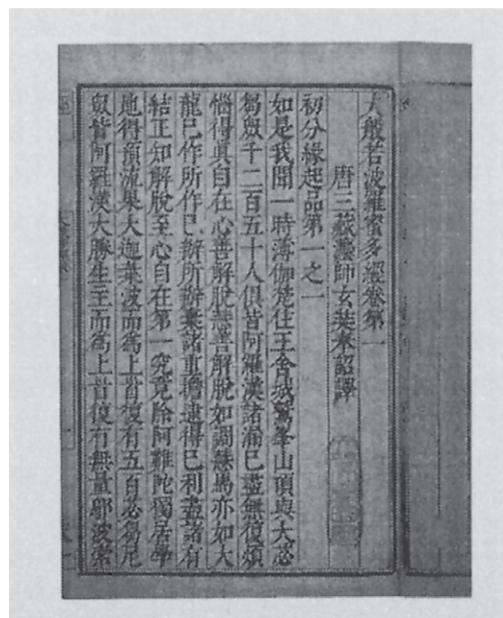


鉄眼版



(扉

絵)



(大般若波羅蜜多經)

※万曆版、鉄眼版、いずれも大谷大学蔵
鉄眼版朱筆書入れは丹山順芸師による校訂

次に、隣接国についてでありますと、そこでの大蔵経は兵火で灰燼に帰した「北宋版」の流れを受けています。というのは、宋の朝廷が近隣国に与えられ、それを基に「契丹版」、「女真版」（「金國版」ともいいます）が生まれてきます。そして、いよいよ高麗版ですが、2回ありまして、「初雕本」については、高麗の韓彦恭が入宋して一蔵を持ち帰り、自国での国威発揚の立場から作られました（1011年）。といいますのは、高麗という国は、たびたび他国から攻められて、国の困難は大変なことでした。それを仏教で以て国を再興しようということで、この大蔵経が作られたと伝えられています。一行の字数は14字の摺帖で焼失した北宋の系統を引いていましたが、その「初雕本」もまた異国が攻めてきて（1232年）、灰燼に帰し、経板の全てを焼失しました。しかし、それにめげずに再び「再雕本」という形で民衆の悲願の下、国を挙げて雕造、16年の歳月をかけて1251年完成しました。この「再雕本」が今日非常に大きな役割を果たしておりまして、いろんな大蔵経の底本になりました。海印寺というところに所蔵されましたので、『海印寺版大蔵経』とも呼ばれています。

明代に入りますと、大蔵経に南と北の流れがあります。「南蔵本」、「北蔵本」で字数は17字です。なお、「北蔵本」は「思渓版」の流れを受けています。

そして「万曆版」ですが、龍谷大学にも万曆版が所蔵されています。字数は17字でも14字でもなしに一行20字詰めで、袋綴の冊子本になっています。それが、やがて日本へきて、鉄眼版=黄檗版として引き継がれます。

清代に入って龍藏ですが、万曆版でなくて北宋本の流れを受けていまして、清藏また龍藏と呼ばれています。一行17字詰め摺帖の勅版です。大谷大学、あるいは龍谷大学にも納められており、京都大蔵会50周年目にして目録が作られました。大型の帙入で「千字文」で以て排架されています。

『頻伽版大蔵経』というのは、これは、今まで中国、インドから中国、中国から日本という流れでありますと、この「頻伽版」というのは、実は中国から日本へ渡ってきて、

日本で作られた大蔵経が、今度は逆に、中国に逆輸入されて作られました。

最後に、日本の大蔵経についてです。先ず「天海版」ですが、寛永期の頃始まりました。宋朝体の文字で「思渓本」を底本にしています。折帖で、料紙は和紙が使ってありますと、西本願寺の経蔵に納められています。

次に「鉄眼版」ですが、中国の明の時代に作られた「万曆版」を模して彫られ、「被彫」と称される覆刻です。鉄眼禪師の発願（1668年 禪師39歳）により開板（版）されたので鉄眼版と呼ばれたり、黄檗山万福寺の黄檗谷、黄檗という名前から「黄檗版」とも呼ばれています。数十年の月日をかけて作られまして、袋綴の冊子になっています。

明治期になり、『縮刷蔵経』（華嚴部を最初に配する構成で、国内最初金属活字版蔵経）、『卍蔵経』（句読訓点を付す）、『卍続蔵経』（日本以外の未収録を多く収める）を経て、大正の時代から昭和にかけて『大正新脩大蔵経』が刊行されるに至りました。その編纂にはパーリ本や梵本も参照され、かつ阿含部を最初に配列する学術的構成がとられています。なお、華嚴・方等・般若・法華・涅槃の順序で構成されている『縮刷蔵経』、阿含部を最初に提示した学術的構成からなる『大正新脩大蔵経』等の分類、組織については、大谷大学図書館の横田先生が詳しくご講説いただいているところです。

この度の研修に際し、大谷大学図書館のご好意で「黄檗版」並びに「万曆版」を展示いただきました。両者を比較いただきながら、被彫の技術に触れていただき、ご苦労の跡を偲んでいただければと思う次第であります。

[参考1] 千字文

天地玄黄(てんちげんこう)	宇宙洪荒(うちゅうこうこう)	日月盈昃(にちげついしょく)	辰宿列張(しんしゆれっちょう)
寒来暑往(かんらいしょうおう)	秋收冬藏(しゅうしゅうとうぞう)	閏余成歲(じゅんよせいさい)	律呂調陽(りつろぢゅうよう)
雲騰致雨(うんとうう)	露結為霜(ろけついそう)	金生麗水(きんせいれいすい)	玉出崑崙(ぎょくしゅつけんこう)
劔号巨闕(けんごうきょく)	珠称夜光(しゅしょうやこう)	菓珍李柰(がちんりだい)	菜重芥薑(さいちょうかいじょう)
海鹹河淡(かいおんかたん)	鱗潛羽翔(りんせんうしょう)	龍師火帝(りょうしふきてい)	鳥官人皇(ちゅうかんじんこう)
始制文字(しぜいもんじ)	乃服衣裳(ないふくいしょう)	推位讓國(すいわいじょうこく)	有虞陶唐(ゆうじゆとうとう)
弔民伐罪(ちょうみんばつざい)	周發殷湯(しゅうはいんとう)	坐朝問道(ざちょうもんどう)	垂拱平章(わいこうへいしょう)
愛育黎首(あいゆりしゅ)	臣伏戎羌(しんぶくじゅうきょう)	遐邇毫体(かじいたい)	率賓帰王(そひんきおう)
鳴鳳在樹(めいほうざいじゅ)	白駒食場(はくくしょくじょう)	化被草木(かひそうもく)	頼及万方(らいきわんぱう)
蓋此身髮(がいしんしん)	四大五常(しだいごじょう)	恭惟養齋(きょういきょう)	豈敢毀傷(きかんきょう)
女慕貞絜(じょばわせい)	男効才良(だんこうさいりょう)	知過必改(ちかひかい)	得能莫忘(とのうば(ぼう))
罔談彼短(ぼうたんひたん)	靡恃己長(ひじきちょう)	信使可覆(しんしかふく)	器欲難量(きょくなむりょう)
墨悲糸染(ぼくひしじん)	詩讚羔羊(しざんがいよう)	景行維賢(けいわいげん)	剋念作聖(こねんさくせい)
德建名立(とくせんめいりつ)	形端表正(けいたんひょうせい)	空谷伝声(くうこくでんせい)	虛堂習聽(きゅうどうしゅうてい)
禍因惡積(かいんあくせき)	福緣善慶(ふくえんぜんけい)	尺璧非宝(せきへいひほう)	寸陰是競(すいんいんせいけい)
資父事君(しむじくん)	曰嚴子敬(えつげんよけい)	孝当竭力(こうとううじつよく)	忠則尽命(ちうそくじんめい)
臨深履薄(りんしんりほく)	夙興溫清(しゆくわうおんせい)	似蘭斯馨(じらんすけい)	如松之盛(じゅうしょうせい)
川流不息(せんりゅうふそく)	淵澄取映(えんじょうゆえい)	容止若思(ようじゅうしわい)	言辭安定(げんじあんてい)
篤初誠美(とくしょくせい)	慎終宜令(しんしゅううぎれい)	榮業所基(えいぎょうしょき)	籍甚無竟(せきじんむきょう)
学優登仕(がくゆうとうし)	撰職從政(せつしょくしょうせい)	存以甘棠(そんいかんとう)	去而益詠(きょじえきえい)
樂殊貴賤(がくしゅきせん)	礼別尊卑(れいべつそんび)	上和下睦(じょうわかばく)	夫唱婦隨(ふしょうふすい)
外受傳訓(がいじゅふきん)	入奉母儀(いりはううぼぎ)	諸姑伯叔(しょくはくしゆく)	猶子比兒(ゆうじしり)
孔懷兄弟(こうかいりすい)	同氣連枝(どうきりんし)	交友投分(こいうとうぶん)	切磨箴規(せましんき)
仁慈隱側(じんじいんそく)	造次弗離(ぞうじふり)	節義廉退(せきぎれんたい)	顛沛匪虧(てんぱいひき)
性靜情逸(せいじせいいつ)	心動神疲(しんどうしんひ)	守真志滿(しゅしんしまん)	逐物意移(ちくぶついい)
堅持雅操(けんじがそう)	好爵自縻(こうしゃくじ)	都邑華夏(とゆうか)	東西二京(とうせいにけい)
背芒面洛(はいぼうめんらく)	浮渭拋涇(ふいきょうけい)	宮殿磐鬱(きゅうでんはんうつ)	樓觀飛驚(ろうかんひきょう)
罔写禽獸(としゃまんじゅ)	画綵仙靈(かくさいせんれい)	丙舍傍啓(へいしゃばうけい)	甲帳對楹(じょうぢょうたいい)
肆筵設席(せんせき)	鼓瑟吹笙(こしそいせい)	升階納陛(じょうかいのへい)	弁転疑星(べんてんぎせい)
右通廣內(ゆうつうこうだい)	左達承明(さたつしょうめい)	既集墳典(きしゅうふんてん)	亦聚群英(えきしゅうぐんえい)
杜橐鍾隸(とうのくじゆ)	漆書壁經(しちょくひきい)	府羅將相(ふららじょうそう)	路俠槐卿(ろきょうかいけい)
戶封八縣(こほうはっけん)	家給千兵(かきゅうせんべい)	高冠陪釐(ごうかんばいれん)	驅轂振纓((こくしんえい))
世祿侈富(せいろくしゆ)	車駕肥輕(しゃがひけい)	策功茂実(さくこうもじつ)	勒碑刻銘(ろくひこくめい)
磻溪伊尹(はんけいいん)	佐時阿衡(さじあこう)	奄宅曲阜(えんたくきょくふ)	微旦孰營(ひんじゅくえい)
桓公匡合(かんこうじょうごう)	濟弱扶傾(せいじゆくふけい)	綺廻漢惠(きかいかんけい)	説惑武丁(わくわんじい)
俊乂密勿(しゅんいんみつぶ)	多士寔寧(たしょくねい)	晉楚更霸(しんしゅうは)	趙魏困橫(ちょうわいんおう)
仮途滅號(かとめつか)	踐土会盟(せんどくめい)	何遵約法(かじゅんやくほう)	韓弊煩刑(かんぺいはんけい)
起翦頗牧(きせんぱほく)	用軍最精(ようぐんさいせい)	宣威沙漠(せんゐさばく)	馳誉丹青(ちよたんせい)
九州禹跡(きゅうしゅううきせき)	百郡秦并(ひゃくぐんしんへい)	嶽宗恒岱(がくそうこうたい)	禪主云亭(せんしゅうんてい)
雁門紫塞(がんもんし	鶴田赤城(けいでんせきせき)	昆池碣石(こんちせきせき)	鉅野洞庭(きょやどうてい)
曠遠綿邈(ことうんめんぱほく)	巖岫杳冥(がんしゅうようめい)	治本於農(ほんのうのう)	務茲稼穡(むしかく)
傲載南欽(しゅくさいなんぱ)	我芸黍稷(がいじゅく)	稅熟貢新(せいじゅく)	觀賞黜陟(かんしゅうちゅっちょく)
孟柯敦素(もうかとんそ)	史魚秉直(しきゆへいぢゆく)	庶幾中庸(しょきうちゅうよう)	勞謙謹勅(ろけんきんちく)
聆音察理(れいいんさつり)	鑑貌辯色(かんめうべんしょく)	貽厥嘉猷(いげきゅうゆう)	勉其祇植(べんきしょく)
省躬譏諫(せいかくわい)	寵增抗極(ちゅうぞうこうきょく)	殆辱近恥(たいじょくきんち)	林皋幸即(りんこうこうそく)
兩疏見機(りょうそくじ)	解組誰逼(かいそくひ)	索居閑處(さきゅうかんしょ)	沈默寂寥(ちんもくせきりょう)
求古尋論(きゅうこじんろん)	散慮逍遙(さんりょじょうよう)	欣奏累遣(きんそううるいん)	感謝歡招(せきしゃかんじょう)
渠荷的歷(きょかてきれき)	園莽抽條(えんもうちゅうじょう)	枇杷晚翠(びわばんすい)	梧桐早彫(ごとうぞうちゅう)

陳根委翳(ちんこんいい)	落葉飄颻(らよひょうよう)	遊鶩独運(ゆうじんどくうん)	凌摩絳霄(りょうまこうしゅう)
耽詠翫市(たんどうがんし)	寓目囊箱(ぐうもくのうしょう)	易幟攸畏(いゆうゆうい)	属耳垣牆(しょくじえんしゅう)
具膳餐飯(ぐせんさんばん)	適口充腸(てきこうじゅうちょう)	飽飮烹宰(はうよほうさい)	飢厭糟糠(きえんそうこう)
親戚故旧(しんききゅうう)	老少異糧(ろうしょういりょう)	妾御縹紗(しうぎょせきばう)	侍巾帷房(じきんいぼう)
紈扇員潔(かんせんいんけつ)	銀燭煌煌(ぎんじょくきょう)	昼夜夕寐(ちゅうやみんせきび)	藍筍象床(らんじゅんぞうしょう)
絃歌酒謡(げんかしゅえん)	接杯舉觴(せつはいきょうしよう)	矯手頓足(きょうしとんそく)	悦予且康(えつよしきょう)
嫡後嗣統(てきごじく)	祭祀蒸嘗(さいじょうしよう)	稽顙再拜(けいそうさいはい)	悚懼恐慌(しょうきょうこうう)
牋牒簡要(せんちょうかんよう)	顧答審詳(こうとうしんしよう)	骸垢想浴(がいこうそうよく)	執熱願涼(しわがんりょう)
驢驥犧特(らうとくとく)	駭躍超驥(がいやくちょうじゅう)	誅斬賊盜(ちうざんぞうとう)	捕獲叛亡(ほくはんぱう)
布射遼丸(ふしゃりょうがん)	嵇琴阮嘯(けいきんげんしょう)	恬筆倫紙(てんひりんし)	釣巧任釣(きんこうじんちょう)
糺紛利俗(しゃくふんぞく)	並皆妙(へいかいかみょう)	毛施淑姿(もうしゅくしき)	工曠妍笑(こうくわんせんしょう)
年矢每催(ねんしまいさい)	羲暉朗曜(ききうよう)	旋璣懸斡(せんきげんあつ)	晦魄環照(かいはくかんしょう)
指薪脩祐(しんしゅうゆう)	永綏吉劭(えいすいきつしょう)	矩步引領(くわいんれい)	俯仰廊廟(ふぎょうろうびょう)
束帶矜莊(そくたいきょうそう)	徘徊瞻眺(はいかいせんちょう)	孤陋寡聞(ころがくもん)	愚蒙等誚(ぐもうとうしょう)
謂語助者(いごじょしゃ)	焉哉乎也(えんさいごや)		

[参考2] 大藏經関係図表

